

# 「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」における記憶の保持と働き

松阪啓子

よこはま児童文化研究所

Keywords : 「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」 遅延条件 記憶保持

## 1. 目的

達成率の減少は遅延時間（保持時間）が長くなるほど大きくなるという仮説の下で、1種3様態の視覚的知覚課題と4種の遅延条件下における記憶の保持と働きの状態を、「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」を用いて実証的に検討する。

## 2. 方法

- (1) 実験参加者は、知的障がいの女性 A (23 歳) 1 名であった。A はこれまで「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」で 1350 課題以上の学習体験をしてきている。
- (2) 研究対象課題のワークシートは、2016 年 6 月から 2017 年 4 月までに実施した視覚的知覚課題の中から選択され、全て本研究所の学習室において実施した。
- (3) 実施方法
  - (a) 呈示—選択の手続き
    - ① 呈示時間は、瞬間呈示の 0.5 秒とした。
    - ② 選択取得までの遅延時間は 0.5 秒、5 秒、10 秒そして 20 秒の 4 種に設定した。
  - (b) 実施装置は、研究所作成の「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」を使用した。
- (4) 本研究用の課題ワークシート  
1 種 3 様態の視覚的知覚課題のワークシートを使用した。

- ① 視覚的知覚課題 21 は、向きの違うカード。



- ② 視覚的知覚課題 22 は、21 番を黒塗りしたカード。



- ③ 視覚的知覚課題 23 は、大きさの違うカード。



## 3. 結果

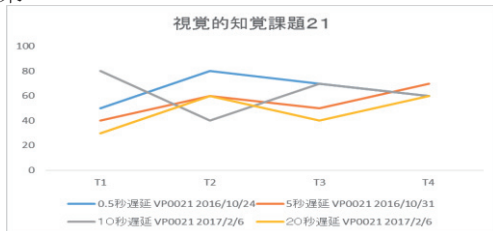


図 1 視覚的知覚課題 21 の結果

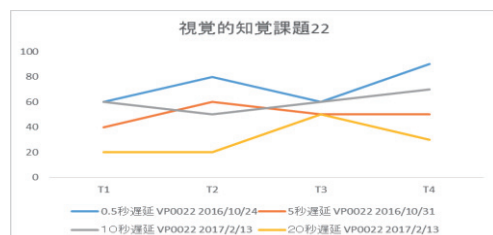


図 2 視覚的知覚課題 22 の結果

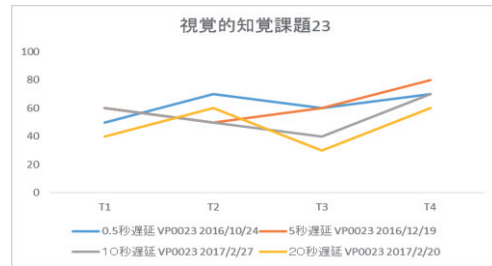


図 3 ; 視覚的知覚課題 23 の結果

表 1 : 視覚的知覚課題の遅延条件における順序と定型「N」型曲線

課題番号	遅延条件	T <sub>1</sub>	T <sub>2</sub>	T <sub>3</sub>	T <sub>4</sub>	定型「N」型曲線
21	0.5秒遅延	2	1	1	2	無
	5秒遅延	3	2	3	1	有
	10秒遅延	1	4	1	2	無
	20秒遅延	4	3	4	2	有
22	0.5秒遅延	1	1	1	1	有
	5秒遅延	3	2	2	3	無
	10秒遅延	1	3	1	2	無
	20秒遅延	4	4	2	4	無
23	0.5秒遅延	3	1	1	2	有
	5秒遅延	1	3	1	1	無
	10秒遅延	1	3	3	2	無
	20秒遅延	4	2	4	4	有

## 4. 考察

考察 1 : 定型「N」型曲線の有無から、まず定型「N」型曲線の考察をしよう。表の 1, 2, 3 から 5 ケースにおいて定型「N」型曲線が見られた。1 2 ケース内で 5 ケース (42%) の結果は本「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」においては、中間率とみなせる。しかし、図 1, 2, 3 からわかるように、達成率は低率を示したケースが目立った。

考察 2 : 遅延条件における順序から、次に、遅延条件における順序を考察しよう。仮説通りの結果を示したのは、視覚的知覚課題 22 の T<sub>2</sub> だけであった。また遅延時間（保持時間）0.5 s における順番 1 は、12 ケース中、8 ケースにみられた。これは 66% の高率であった。また、遅延時間（保持時間）20 s が 1 番になることはなく、順位 4 番が 8 ケース (66%) に見られた。これは、ある程度仮説を支持したと考えられる。

## 4 結論

考察の 1, 2, 3 から、仮説通りの結果は得られなかった。視覚的知覚課題の達成率は記憶の保持だけの問題ではなく、記憶過程全体（記憶—保持—想起）として考えなければならないことがわかった。

論文作成に御協力下さいました A さんと、ご家族に心より感謝申し上げます。

Keiko Matusaka